り。

僕も営業の人と一緒に配達も行った。問屋さんに行くと、本数の多いのはパレットで納品できるけど、納品数の少ないのは5段に積めって言われるじゃんね。前に納品した古いケースをどかして新しいヤツを2個、3個って積んで、その上に古いヤツを4個、5個って5段まで積み上げる。僕、身長が173㎝あるけど、5段っていうとぐっと（手をいっぱい伸ばす動作）こうだね。木箱はグラグラするし。僕がやっちゃったのは、積んだ酒の裏に焼酎があっただけど、ボンッて5段目を乗せた時に裏の焼酎に当たって、ダーッって焼酎が崩れて30本くらい割っちゃった。それは会社で弁償したと思うけど、それからはすっごい気をつけるようにした。

ひっくり返したのは初めての配達の時だったかな。5段は未知の世界だったもんで、「5段ですか」って聞いたら、「うん、5段5段」って。5段積むのがあたりまえだった。一緒に行った僕よりうんと小柄な金田さんも「よい、しょっ」っていう感じで5段上げて、「ほんなもん、あんじゃないえん（そんなのは何ともないよ）」って言ってね。

木箱からプラスチックの箱へ

平成の初め頃には一升瓶が8本入るP箱も使った。これは自社で作ったもので、黄色いプラスチックのケースに蓬莱泉って赤字で書いてあった。北設楽郡内で空瓶を循環させる目的で作って、出荷する時にP箱保証金をつけて、回収してきたら保証金を返すしくみ。当時は一升瓶も1本10円で回収していた。この箱は必ず返ってくるから、瓶が回収できるという狙いで始めたけど、だんだん郡外への出荷が多くなって、返ってこなくなっちゃった。それで全部6本入りのP箱にした。（注1）

四合瓶を詰めるのにレイメイっていうビン詰めの機械があって、16本のノズルがついている。洗った瓶を台に置いて、ノズルに1本ずつ挿していく。16本が詰まったら、1本1本取ってコンベアに載せる。（瓶を箱から）取る、詰める、載せる、（ノズルに）挿す、取る、（コンベアに）載せるを1人で手作業でやっとったじゃんね。僕、作業が速いもんで1時間に二千本くらいの勢いで詰めて、機械メーカーの社長さんも「このレイメイでこれだけの数を出す人はいない」と褒めてくれたくらい。

平成の初め頃、「空（くう）」（酒の銘柄・純米大吟醸）の出荷本数が増えて、1回のビン詰が最初は四合瓶で三千本くらいだったのが、どんどん増えて一万本くらいになった。一人で詰めるのはえらくなった（大変になった）もんで社長（現会長）に頼んで「ビン詰の機械を入れてください」って頼んだら、ビンをラインに流して、酒を詰めて、検ビンして、ラベルを貼って、P箱はパレットに自動的に乗せてくれるっていうラインを作ってくれた。

その頃は古ビンも使っておったけど、それまでビンを洗うのと詰めるのとふたつの作業に別かれとったのが、洗いながら詰めるようになって楽になった。その機械を入れたことによって、木箱をやめて6本P箱にした。木箱は整形が甘いもんで機械に入らないというか、ラインを流れていくのもあれば流れていかんのもあったので統一規格のP箱にしたわけ。

ビン詰の設備を新しくした時に、木のパレットも使えるようにしてあったけど、ちょっと作りが悪かったり傾いたりしとると、パレタイザー（パレットを積む機械）がちゃんと積まんかったりする。腐ってくる箱もあったもんで、木のパレットはやめることにした。機械が入って来ると精密になって融通がきかなくなってくる。木のパレットは平成10年くらいまでにはなくなったと思う。

木箱からP箱に変わったのは劇的な変化だった。ビン詰ではもう機械がパレットに積んでくれて僕らは箱を提げなくてもよくなった。でも8Pと木箱は積む時に箱の向きを組めるから、ちょっと揺れても倒れない。6Pは棒積みだからリフトで運んでいる時にブレーキをポーンと踏むとガチャーンといっちゃう。6Pを使うようになってからは上から挟むリフトを使うようになった。

入社して三年目くらいにビン詰に新しい機械が入ったかなと思うけど、その頃が増産の節目だった。同じ時期に「空」とか「美」とか、吟醸酒がすっごい出るようになって、（注2）四合瓶の生産量が増えてきた。カップを詰める作業も本数が増えて、最初の工程は一人で容器を取って、4本のノズルに交互に挿して、酒が詰まったらコンベアーに乗せていくんだけど、動線が複雑で大変だった。僕が一番若かったからそれを専門にやって、リズムよくやっていたつもりが目が回ってぶっ倒れちゃったりして、まあ限界だなあということになった。僕が社長に「すみません」って相談に行くと、「分かった」って言って機械を新しくしてくれて、そんなことの繰り返しで設備が整っていった。

箱の形状とお酒のラベル

昔の一升瓶のラベルは今より小さくて、ラベル、証紙、肩貼りの3枚貼りだった。ラベルはちょうど木箱のしきりには当たらない所に貼ってあった。すき間があればラベルは当たらんから傷まない。木箱があの形でずっと使われ続けてきたのは、箱から出ているところに証紙と肩貼りが見えるとお酒の種類もパッと見て分かるという利点もあったんじゃないかな。その頃大手のメーカーさんは大きいラベルを使っていた。もう大手さんはおもにP箱を使っていたんだと思う。

一升瓶のラベルは機械で貼っていて、板にローラーがベーッと走ってのりをつけたら、ラベルの入ったボックスから胴、証紙、肩の3枚1組のラベルを取ってきてビンにベタッと貼るしくみ。ところが肩を貼るツメの出方が均等じゃないとすごく傾く。ツメの微調整をして傾きを直す板があって傾き始めたら調整をする。そもそもラベルを並べる時に均等に当たらない。ラベルが貼られてないのも問題だけど、傾くっていうのも問題なわけで。

直し方を後藤さんに教えてもらって、できるのは僕と伊藤さんの三人しかおらんかった。だけど、調整だなんだと自分等がチンチンになっちゃう（かかりきりになっちゃう）もんで、6本のP箱になってから、社長に「ラベルを1枚貼りにすれば、貼ってあるかないかだけ見ればいいから」って言ったら、社長が「いいよ、そうするか」って言って1枚貼りのラベルを貼れる設備に変わった。

「空」のような高級なお酒は、瓶に傷がつかないように一升瓶でも最初からP箱でなくて6本入りのダンボールを使っていた。

一番面白い時期に仕事をしてきた

昔は忙しくはなかったけど大変だった気がする。今は洗浄した瓶を仕入れているけど、回収してきた瓶は洗う前にラベルとか見ながら一本一本確かめて、「油の瓶は絶対入れちゃいかんよ」って言われておったし、マムシの入っている瓶もあった。そこでいろんなメーカーさんの瓶が見れて「これ、なかなかないやつだぞ」って教えてもらったりして勉強になった。

お酒の仕込みも朝四時から手伝って、朝ご飯を一緒に食べたり、たいがいの仕事をやらせてもらったから、今でもあっちこっちの仕事に意見が言えるんだと思う。今の若い社員は蔵に入ったら入りっぱなしで、ほかの部署のことをやってって言われても、何をしていいか分からない。

ゆったりのんびりしていた時も知っているし、ぐわーっと急成長した時期もあったし、会社の一番面白い時期を働いてきて今の自分があるなって思う。

■注1　6本入りのP箱：1.8リットルびん用6本入プラスチックコンテナー（通称P箱、6P）現在一升瓶はこのケースで流通している。業者はメーカーに箱を貸し出し、回収、洗浄して再使用するしくみ。酒蔵は自社で使用した分のレンタル料を業者に支払っている。

■注2　日本酒業界では戦前戦後の米不足、戦後復興期の日本酒の需要の急増に対応していく経緯の中で質より量の酒造りが長く続き、品質の向上は後回しにされていた。洋酒類などほかの酒類の台頭もあり、日本酒の消費量は昭和47年をピークに減少していった。昭和50年代から中小のメーカーでは品質差別商品として、純米酒や吟醸酒を売り出す動きが起きる。関谷醸造では昭和60年に純米大吟醸　空（くう）を発売。再現性の高い高品質の酒造りと労務環境改善を目指して積極的な機械化を進めて成長していった。

かつては日本酒は一升瓶が主流であったが、平成を迎えた頃から消費者の嗜好の変化、生活様式の変化に伴い商品の種類が増え、小容量の商品に移行している。

リンゴ箱といえば……

静岡県南伊豆町　山本はま子

今や、SNSという手段であっという間に情報が伝わってしまう時代となった。離れたところに居ながらにして情報を共有したり、発信したりできてしまう。上手く使えば便利なのだが、どこかに不安を覚えたりしつつ通信の発達に追いつけないままでいる。ただ、どんな山奥に住んでいても、この便利になった通信に支えられている生活があることも事実だ

私は交通の便についていえば、とっても不便な場所に住んでいる。現在は、とりあえず車が運転できるので日常を過ごすには事足りているが、年を重ねる今後を考えたとき、足の確保に不安はある。そんな山里に住み続けて60数年が経過した。

伊豆半島の山里で少女時代を過ごした私には、リンゴ箱といえばこんな思い出がある。

小学校4年生ぐらいだったと思う。今では死語といえるかもしれないが、「文通」という方法で遠く離れた地方の友人と情報交換をしていた。3才年上の姉が文通をしていて、その相手の方の紹介だったと思う。私と同学年の女の子だった。私は暖かな伊豆半島の住人で、彼女は当時岩手県北上市という東北の寒い地域の住人だった。

交換した手紙の内容はもうすっかり忘れているが、日々の学校生活のことであったり、友達や家のことなど身近なことを書いていたのだろうと思う。たまには写真を交換したりもした。昭和41年頃から4年ほど続いたと思う。中学生になって徐々に手紙を書く回数も少なくなりやがて忘れてしまった。送られてきた中学生になった彼女の写真は、ショートカットの大人びたセーラー服姿だったことを覚えている。

そんな彼女の家は北上市のリンゴ農家だった。毎年11月ごろになると、木製のリンゴ箱に入ったリンゴが届いた。リンゴ箱にはスクモ（籾殻）が入っていて、リンゴは一つ一つ紙に包まれたうえにスクモに守られて、キズひとつなくきっちりと収まっていた。釘で打たれたリンゴ箱のふたを釘抜きで開けてもらい、リンゴを取り出すとふわぁ～っと良い香りがしたのを覚えている。伊豆ではなかなか手に入らない当時のリンゴで「スターキング」といったと思う。甘くて香りがよく、その上蜜入りだった。

当時の宅配は今とは違って、岩手県から伊豆半島に届くまで3日ぐらいかかっていたのではないかと思う。きっと列車に載りトラックに何度も乗り換えて届けられたものだと思う。その上、当時は自宅まで配送はされなかったため、取り扱い所になっている酒屋まで父が取りに行ってくれていた。自家用車がない時代だったので、耕耘機に牽引リヤカーをつけたマイカーで公道を走っていた。ちなみに、この父のマイカーはナンバープレートを着け、平成20年頃まで国道414を走っていた。

リンゴ箱は、毎年送っていただいたその数年の間に、段ボールに変わったような気がする。スクモもなくなり、緩衝材に一つ一つ包まれたリンゴが届くようになっていった。そしてリンゴの種類も赤い「スターキング」と黄色い「ゴールデンデリシャス」の詰め合わせになっていったことを覚えている。伊豆半島ではリンゴといえばまだ紅玉か国光が主流だった。めずらしいそのリンゴはご近所など数軒にお裾分けされていった。

お返しにはもちろんミカンだったが、わが家はミカン農家ではなかったため、親戚の農家から分けていただき送っていた。父は箱詰めのミカンに宛名を書き、またマイカーで取扱所まで運んでくれていた。

そんな文通の相手のことをふと思い出したのは、あの東日本大震災の時だった。

もう50年も前に、岩手県北上市に暮らしていたリンゴ農家の娘さん、伊藤和子さん。お元気ですか。どのような人生を送られてきたのかは分かりません。今、どこで暮らされているのかも分かりません。ただ、無事で元気に暮らしておられることを願うばかりです。

私のリンゴ箱の思い出は、少女時代のノスタルジックとなりました。

地域通貨のあるまちで

老後は気ままな百姓ライフ

武蔵野（東京都国分寺）　船橋　旭

国分寺に移住し、約6年半になります。出来上がった2世帯住宅の周りの土地に小さな菜園をつくり野菜作りを始めています。陽があまり照らないところには、梅。柿の木、無花果、柚子。八朔、ブドウなどの実のなる樹木を植えました。だから植えてもう5年以上経ちました。

家庭菜園にはいろいろ試した結果、心配なく育つものに絞さや、スナップエンドウ、ミニトマト、九条ネギ、分葱、大葉が便利なものだと解かりました。今までに失敗した作物は春菊、ブロッコリー、小松菜、玉葱があります。玉葱以外は害虫にほとんど食われてしまいました。玉ねぎは大きくなりません。だから今は成功したものだけをつくっています。

我が家の庭は3月からは日当たりがよくすくすく育ちます。もちろん無農薬です。これからは少しでも自分でできるものを栽培し、できるだけ地元でとれた野菜果物を手に入れ地産地消、自給自足、地域で賄うことを少しでも増やして行く生活をしようと考えています。

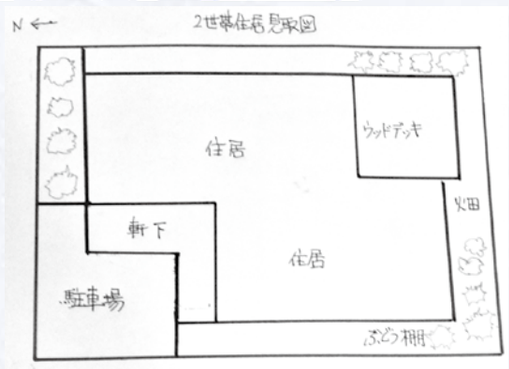
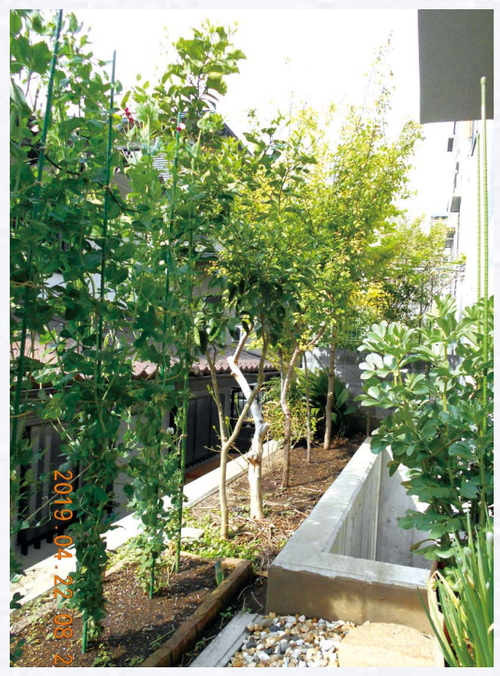
今年初めて梅が取れました。4㎏程です。3㎏は梅ジュース、1㎏は梅酒にしました。昨年は柿の禅寺丸が100個ほど取れて干し柿にしました。今年はピオーネと巨峰の実がなっています。昨年は巨峰が3房ほど出来ましたが、紫色になった時点で鳥にすべて食べられてしまいました。だから今年は7月の初めに紙袋をかぶせました。17房ほどなっています。

柑橘類では八朔（はっさく）が今年初めて実をつけ少ないですが10個程なっています。今年の柿は裏年なのか10個ほどしか実をつけていないようです。我が家のまわりの土地の見取り図、収穫物とその産物、家庭菜園の写真をご覧ください。

国分寺には地域通貨の「ぶんじ」があります。先日この「ぶんじ」の説明会があってワイフと参加しました。ホームページから説明文をコピーします。国分寺地域通貨「ぶんじ」は「お金」であり、メッセージカードでもある地域通貨「ぶんじ」です。誰かのやさしさや、丁寧な仕事に対して、メッセージを書いて渡す。それは、その先にある「贈り手」のことを想像し、「受け取ったよ」「ありがとう」と感謝の気持ちを示す行為でもある。そう、お金は何かを「手に入れる」ための道具でなく誰かのやさしさや丁寧な仕事を「受け取る」ための道具にもなる。そして受け取ってくれる人の存在は忘れかけていた贈ることのよろこびを、もう一度思い出させてくれるかもしれない。そして、ぶんじはまた、次の「贈り手」に向けてめぐっていきます。ここまでコピーです。

この通貨を手に入れるにはこの通貨に参加しているお店でおつりとしてもらう、イベントに参加する、誰かの仕事をお手伝いする…など、いろいろ受け取ることができます。農家さんで市場に出荷されない農産物も購入できるようです。地域社会への活動参加にはとても役立つツールです。これから活用の工夫をしてみようと考えています。

僕らの世代は年金がじゅうぶんではないですが生活の下支えにはなります。それに少しばかりのその他収入があり、娘世帯から貰い物やわずかばかりの家庭菜園と近所の農園から購入する野菜などもろもろの持ち寄り家計で成り立っています。安全な食品類は生活クラブ生協から購入します。毎日の生活、生き方（言い換えれば死に方）は食から始まり食で終わると言ってもよいくらい大切なものだと思います。僅かでも自分で栽培した食物を手に入れることは楽しいものです。また地元でとれた作物を食することも意味あることです。だから老後は「百姓」百（いろいろ）の姓（かばね）を実践しています。家庭菜園に日曜大工、家事手伝い、孫の世話、孫の教室への読み聞かせの準備、ハーモニカのボランティア活動、憲法教室、哲学カフェ参加の市民活動と自由気ままになんにでも参加する生活が楽しいものです。

（参考図書：上野千鶴子著「老いる準備」朝日文庫）

2019年7月28日